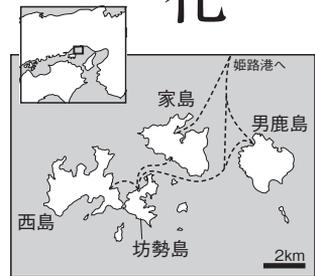


家島観光事業組合

民間中心の観光で諸島全体を活性化

—海運・採石・漁業に次ぐ第4の産業に

いえしまコンシェルジュ 中西和也



家島諸島：姫路港の南西約17kmの播磨灘にある群島。全域で家島町を構成していたが、平成18年に姫路市と合併。有人島は家島・男鹿島・坊勢島・西島の4島で人口5,018人(平成30年12月末現在)。瀬戸内海の要地にあって古くから海運業や採石業、漁業で栄えてきた。

家島諸島全域の事業者・団体で組織

家島、坊勢島、男鹿島、西島の四つの有人島と四十あまりの無人島を有し、約五〇〇〇人が住む家島諸島。家島観光事業組合は、その中でもっとも人口の多い家島の玄関口「真浦港ふれあいプラザ」内に事務所を置いている。

現在、筆者も一組合員として関わっている事業組合が活動をはじめたのは、二〇〇六年のこと。旧家島町と姫路市との合併により、約二十年間、家島諸島の観光に携わってきた家島町観光協会が消滅。民間主体で観光による島の活性化を目指し、料理旅館おかべを経営し現在まで組合長を務める岡部賀胤さんが中心となり、創設された。

当時、島の基幹産業である採石・海運業は今よりもまだ好調。島人の観光への意識は皆無と言えるほどの状況のな

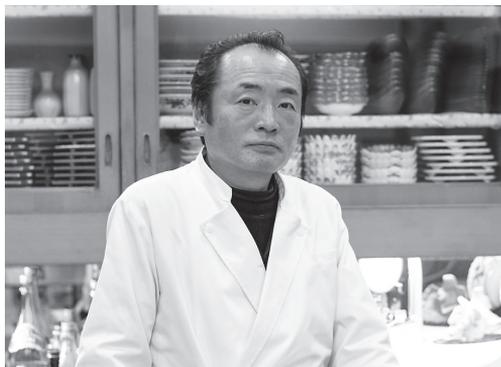
かで、観光の活性化に取り組んできた。

設立当初の組合員は一九団体だったが、現在は飲食店や旅館業者、船会社のほか、商店や家島・坊勢の両漁業協同組合、水産加工業者など三〇団体となっている。

「観光は、島が一体となって取り組むもので、観光業者だけでなく、諸島内の地域団体や小売店と広く連携をとる必要がある」

この岡部組合長の方針により、諸島内の各団体と連携、組合員を増やしてきた。

運営資金は、年会費二万円のほか、船の待合所を兼ねた真浦港ふれあいプラザや、プレジャーボートを係留できる「ビクターパス」の管理受託などで賄っている。そのほか、島内一大きなお土産売り場である同プラザの売店の売り上げ、電動アシスト自転車や超小型EV(電気自動車)のレン



家島で料理旅館を営む岡部組合長。

タル事業も大きな収入源だ。

年末年始以外は毎日一〇時から一六時三〇分まで（日曜・祝日は九時から一七時まで）パート職員二名が交代で勤務し、常時一名体制をとっている。

「売店や貸出業務に加え、観光客への窓口対応のほか、電話やメール、FAXでの

の問い合わせにも対応するなど、業務は多岐にわたり、事務所の運営にあたっては苦勞も多いが、観光産業の発展のため全力で取り組んでいます」と岡部組合長は話す。

旅行会社との連携で来島者増、島内の意識も変化

事業組合がまず取り組んだのはウェブサイトの整備。姫路食文化協会や姫路観光コンベンションビューローに入会し、外部のサポートも得ている。

また、会員企業でもある旅行会社JTBと二〇〇九年に提携。全国の支店で取り扱っていた「日帰りツアー」ちえ「地恵

のたび家島」を造成し、二〇一一年に本格販売した。

これにあわせてメディアに取り上げられることも増え、観光客数が増加。島の観光に対して、島内も行政も関心が高まり、ここ一〇年で事業規模も拡大してきている。家島諸島への観光客は現在、年間約一〇万人で日帰り・宿泊とも、京阪神からのお客さんが大半。最近では、外国人観光客の姿も少しずつ見かけられるようになってきた。

観光客増にあわせてはじめたレンタル事業

観光客数の増加にともない、「島チャリ」と称して家島での電動アシスト自転車の貸出をはじめた。保険加入の問題など障壁もあったが、市やJTBの協力でまず四台を導入することができた。小さい島ではあるもののこれまで島内の移動手段がなかったために観光客には好評で、今は一四台に増え、さらに坊勢島でも導入している。

また、二〇一七年春には新たな移動手段として、超小型EVを三台導入。レンタル費用



2017年に導入した超小型EV（電気自動車）。島の中学生が原案を作成したキャラクター「いえしまろう」が描かれている。

は最初の一時間が二八〇〇円、以降一時間ごとに一〇〇〇円と決して安くはないが、予想以上の反響で繁忙期には三台がそれぞれ一日三回転するほど好評を博している。一方、貸出時に保証金の集金、注意事項や承諾書の説明、車体の状態確認と操作説明、返却時に車体の状態確認、保証金返却など、運営にかなり労力がかかっているのも事実で、今後の検討課題となっている。

さまざまなイベントを継続して実施

これまで事業組合が取り組んできたことは多岐にわたるが、いくつかは恒例行事として定着してきている。

二〇一二年に市からの受託で「パーソナリティと家島を歩く」イベントを開催。ラジオ番組の人気パーソナリティと一緒に観光客が島を歩くことで、広く島の魅力を知ってもらおうという趣旨で、初年度は約一五〇人が参加。以後毎年、家島と坊勢島交代で実施している。「来年も参加します!」という参加者の声もあり、リピーターも多い。

毎年一〇〇〇人を集める島の一大イベント「いえしまーけっと」では事業組合が中心的な立場として関わり、事務局機能も担っている。この催しは、二〇一二年度に筆者が閑散期の三月にも島の食と人の魅力を知ってもらう目的で始めたものだが、二〇一四年度から事業組合をはじめ島内の団体でつくる家島観光まちづくり協議会が主催しており、小学校運動場を会場に島内の飲食店や地域団体がバザーを

出展している。

家島町観光協会時代から引き続き毎年実施されている「家島町観光釣り大会」は、二〇一八年で三一回を数えた。家島諸島全体の活性化に向け、家島と坊勢島と男鹿島の持ち回りで、一年ごとに会場を変え実施している。

事業組合を事務局に、行政も加わった組織を設立

事業組合が関わっている活動でもっとも大きなものの一つが、二〇一三年度から三年間、農林水産省の都市農村共生・対流総合対策交付金を利用して設立した「家島諸島都市漁村交流推進協議会」の取り組み。家島観光事業組合よりもさらに組織体制を広げ、諸島内の漁業組合や自治会、商工会、さらに市や県も参画し、まさに家島諸島全体で観光に取り組もうという姿勢を明確にしたものとなっている。推進協議会の事務局機能は事業組合が担っている。

推進協議会では旅行会社の協力も得て、三年の間に「家島しまたび」と銘打ち、既存のガイドや体験プログラムをブラッシュアップ、再編する形でパンフレットやウェブページを整備した。食を含む滞在プログラムの魅力を「見える化」したことで、個人旅行者から団体ツアーまで幅広い要望に応えることができるようになり、現在に至るまで多くの旅行会社利用されている。

この「家島しまたび」は、助成期間を終えた現在でも続いており、新たなツアーやプログラムも造成されている。

二〇一七年に国土交通省から発表された「滞在交流型観光を通じて離島創生プラン」でも、「島たび」「コンシェルジュ」の活用が明記されていることから、先進的に取り組んでいたことを筆者自身再認識している。

また、「渚泊^{なみぞら}」と称して、漁業が盛んな坊勢島において漁師民泊を実施している。

家島で旅館を経営する岡部組合長も、「同じ家島諸島であっても、坊勢島には家島とは異なった魅力があり、これからさらに観光産業に力を入れていくことで、より多くの人に魅力を感じてもらえると思う」と背中を押す。

イベント企画で幅広い世代を島へ誘致

ここ数年は、島外の方や団体の協力を得て、さまざまなイベントを島で実施している。

推進協議会と能楽師の辰巳満次郎さんとの縁から、二〇一五年にはヒメボタルが舞う中、由緒ある家島神社境内にて能を披露した。翌年には夏祭りで使用するだんじり船の上で能を舞うツアーを実施。船上での公開奉納能はこれまでになく、全国各地からの来島者があった。この企画は真浦区会、宮区会など島の各地区の強い後押しがあったことで実現できた。

二〇一七年には、旅行会社や一般社団法人グローバル人材育成支援機構と連携し、帆船「みらいへ」を用いた、大阪港から家島諸島を航海する二泊三日のセーリング、漁業

体験ツアー「帆船みらいへSAIL CAMP 家島諸島航海としま遊び体験」を実施。さらに同年から二年間、環境省近畿地方環境事務所主催で近畿地方在住の小学生を対象に、自然体験型プログラムを開催した。一年目は家島と男



2017年に帆船「みらいへ」を活用したイベントを実施。

鹿島、二年目は坊勢島と西島を舞台に、漁業見学やカヌーなどの自然体験を通して、島の魅力を感じとるプログラム。単純な遊びだけのイベントではなく、島と都市とを比較した地域性を学ぶ要素も取り入れる工夫を行った。

二〇一七年と二〇一八年において、事業組合がもっとも力を入れたのはサバ寿司の企画・開発。ただのサバ寿司ではなく、刺身でも食べられる坊勢島のサバを使った「究極さば寿司」と銘打った。当初は全国発送も検討したものの、冷蔵後の酢飯とサバの味・食感の変化に納得がいかず、現在はそれを逆手にとり、島でしか味わうことができないサバ寿司として売り出している。



「究極さば寿司」は新鮮な坊勢島のサバを使っている。

今春、一般社団法人化を計画

「私は海運業を生業とした岡部家の四代目。砂利運搬船は景気に左右されるのでやめた。姫路で修行後、家島に戻り、二六歳から料理旅館を経営している。絶対に潰さないという気持ちで商売をはじめ、地域一体となった観光産業を興すという思いで、家島観光事業組合の長を一二年間務めてきた。もっとも大変だったのは観光案内所機能の姫路市との統合で、姫路市から事業組合への業務委託が打ち切られたこと。この時も、多くの方にお世話になり、何とか存続できた。ほとんど知られていなかった家島という名前が少しずつ認知されてきたことは成果だと思う。島のみなさんの後押し、力をあわせた努力の結果だと考えている」

さらに岡部組合長は「任意団体である事業組合は今年四月に一般社団法人化を目指している。より一層の信用が得られるほか、法人化にあわせて旅行業の登録をすることでツアーの造成など、独自にできる業務の幅が広がる」と今後の展望を語ってくれた。

事業組合は「家島諸島の観光問い合わせ窓口」を掲げており、行政機関はもちろん、企業や個人、学生などからさまざまな問い合わせが寄せられる。

その中で、今拳がっているのが島を舞台に映画を撮りたいという話だ。これまでと違った形で島を宣伝できるのではないかと前向きに検討している。しかし、受け入れには



坊勢島で水産加工業を営む森副組合長。

課題もある。演者やスタッフが長期滞在するため、一泊二日など通常の観光滞在とはオペレーションもまったく異なり、宿泊・食事などにおいて地域の協力が不可欠だ。「これまでのさまざまな取り組みに挑戦してきたように結束して対応すれば、満足する成果を上げられると考えている」と、岡部組合長は期待を込める。

水産業と観光の連携で魅力を発信

坊勢島では、現在、体験観光用に大人数を収容できる漁船を新たに建造しており、これを活用したツアーも今後、積極的にこなっていく予定だという。

坊勢島で水産加工業を営む森一成副組合長は、家島諸島の観光と漁業の視点から、「これからの日本は美味しいもの

が食べられない食料難になると思う。しかし、家島諸島にはその資源＝宝物がたくさんある。渚泊は坊勢島にとって、その宝物を活かして人口減少を食い止める取り組みになると期待している。勉強会を開催するなど、渚泊の重要性を伝えることで成功事例を増やし、島の活性に結びつけたい。観光という切り口のなかでも、さまざまな角度から情報を発信していきたい」と語る。

また、今後の観光活性化について岡部組合長は、「観光産業を興すには、官民の協力が絶対条件だと思っています。観光地としてのハード整備などは行政で、ソフト面は民間で、それぞれができることを分担しながら取り組みたい。また、家島諸島の有人四島はそれぞれ異なる魅力があるので、それらをより磨きたい」と話してくれた。

家島諸島の挑戦はこれからも続く。



中西和也（なかにし かずや）

1985年大阪市生まれ。熊本県立大学卒。「いえしまコンシェルジュ」養成講座参加を機に2011年に家島に移住。観光ガイドをベースとした島の魅力発掘をなりたいとしている。2014年から「男鹿島うみのいえ」を運営、2018年に家島にカフェ「スコット」をオープンした。観光以上、移住未満の島との関わり方として「週末島活」を提唱している。